

【調査報告】

沖縄県久高島における旧正月

山本 恭子

はじめに

久高島は沖縄本島の南東部に位置し、安座間港から定期船で約20分の離島である。島の周囲は約8キロで南北に細長く、集落は南側に存在する。2017年の統計では人口は246名、137世帯であるが、実際に島で生活している人は180名程度であり、1つの字^{アザ}として区長がとりまとめている。神の島と言われ、現在でも年間20以上の神行事が旧暦で執り行われている。集落の北部には久高殿^{クダカトウ}、外間殿^{フカマトウ}と言われる二つの宮があり、外間殿^{フカマトウ}では正月の神行事や十五夜の神行事、久高殿^{クダカトウ}ではハティグワティなどが行われる。また、久高殿^{クダカトウ}はイザイホー^{クダカトウ}の主祭場でもあった。さらに、これらの神行事以外にも各家での御願も行われている。家庭での御願は多くは主婦が行っており、毎朝、3つの湯呑みにお茶を入れて家族の無事や健康を祈り、毎月1日と15日には香炉に線香を立てて祈っている。また、家族の干支^{トシビ}の日は年日と言われ、特別にその人のために祈っている。このように家の中で主婦が行う神事もたくさんあり、島人の生活の中には神の存在が息づいている。

かつて1970年代までの久高島では、神行事を司祭する久高ヌル、外間ヌル^{ニーガン}、根神^{ニーガン}が君臨し、12年に1回イザイホーと言われる主婦が神女^{カミンチュ}（巫女）に就任する儀式が執り行われ、神女^{カミンチュ}に就任し、神行事を支えていた。イザイホーを受けた女性は、初めはナンチュ（30才から41才）と呼ばれ、ソーヤク（40代前半女性）、シュリユリタ（40代後半～50代前半）、ウンサクー（50代後半）、タムトゥ（60才～70才）に昇格していく。ソーヤク以上の階層をヤジクという。そして、70才になるとテーヤクと言われる儀式を経てその役割を終える。一方、男性も15才になるとンナグナーと呼ばれ、16才から70才までを正人、なかでも50才から70才までを大主^{ウブシュ}という。また50代^{ムラガシラ}で村頭、60代でソールイガナシーを順に務める。このように、女性も男性も年齢により、決まった役割を持っていた。

現在、全ての神女がテーヤクし、久高ヌル、外間ヌル、根神^{ニーガン}も不在であり、神行事はウムリングワ^{ニーガン}である2名の神女が支えている。年中行事の中でも、旧暦の8月10日から12日にかけて行われるハティグワティと旧暦の元日から3日にかけて行われるシャク^{ウガ}^{アザ}^{アザ}^{アザ}（盃事）は、字を挙げて盛大に執り行われている（山本 2017）。

近年、沖縄本島では正月は新暦で行われているところが殆どであるが、久高島では現在も正月は旧暦で祝っている。旧正月には神女^{カミンチュ}が行う外間殿^{フカマトウ}でのシャク^{ウガ}^{ウガ}^{ウガ}^{ウガ}^{ウガ}ははじめ、仕事始めの行事

であるハチウクシーや各家庭で行われるトゥシヌユールヌ^{フエ}挿^{フエ}も行われている。

本稿では主に2018年2月15日（旧暦では大晦日）から2月18日（旧暦1月3日）、沖縄県南城市久高島における旧正月の神行事と各家での旧正月について、写真、ビデオ撮影およびインタビューを行い情報収集、記録したものをもとにまとめた。

1. 1976年から1977年頃の旧正月

はじめに、比嘉（1990, 1993）による記録から1976年1977年頃の久高島の旧正月について記載する。元日の3日前から外間^{フカマトゥン}殿、久高ヌル家においてハカイメー（供出）が行われ、ヤジク1人あたり米1合と甘藷2個が集められる。翌日、その米でソー^ミジャク^キ3)が神酒を作り、外間^{フカマトゥン}殿の掃除を行う。甘藷は正月の盃事の供え物であるン^ニモー^キカシー^フ4)となる。そして、大晦日にもハカイメーが行われ、お金と正月の盃事に使われるお酒1合が集められる。また、大晦日の午後には久高ヌルと村頭^{ムラガシラ}の妻がシラタルの宮、バイカンヤ^フ5)（ウミヘビを薫製にする小屋）にピサイサンニ^フ6)と角煮を供えて祈願する。各家ではヒヌカン^フ7)、トゥパシリ^フ8)、トゥクヌカン^フ9)、仏壇の香炉を掃除し三色紙（赤、白、黄の紙を重ねた物）を置きミカン3個を並べ、トゥシヌユールヌ^{フエ}挿^{フエ}（家族の健康祈願）が行われる。元旦は朝から外間^{フカマトゥン}殿ではン^ニモー^キカシーと魚料理、久高^{クダカト}殿ではイラブージュ^フシー^フ10)が作られ、午前9時ごろ外間ヌル家ではピサイサンニ、ン^ニモー^キカシー、煮魚が供えられ、外間ヌル家に集合したヤジクたちが、外間ヌルを先頭^{フカマトゥン}に外間^{フカマトゥン}殿に向かう。外間^{フカマトゥン}殿では外間ヌルの先導により、元旦の朝の神謡（ティルル）であるヘーナガ^フギーが約20分間にわたって謡われる。内容は年中行事が無事に行われ、神女の守護が果たせること、健康祈願、大漁、豊作、航海の安全などである。その後、シャク^{ウガ}挿^{ウガ}みが行われる。これは、参列者が外間ヌルと根神^ニといわれる2名の女性神職者に対して酒盃をさしあげて1年中の健康をお願いするもので、男性は6名の神職者（ソールイガナシー2名、ハニマンガナシー、アカツミー、チチヤ大王、ハニヌハンザナシー）と16才から70才までの男性、女性は10名の神職者（ムンプジー、ムンパー、シマリパー、イティティグラー、ヒーチョーザ、ファガナシーヌクウガミ、ウミトゥクウ、アジガユーヌハミ、根神ウメギ、外間ノロウメギ）とソー^ミジャク以上のヤジクが参列する。元旦の外間^{フカマトゥン}殿での盃事が終わった後、男性神職者たちが久高ヌル家でもタミヤウガミといわれる盃事をする。そして3日にも外間殿において、ミツチャヌスクといわれる盃事が行われる。元旦の盃事は男性から始めて女性の順に行い、3日は女性から始めて男性の順に行く。男性の後にタビジャク^ミと言い当日参加出来ない家族のためにその身内の者が代理で神酒をもらって持ち帰る。そして2日には年頭の仕事始めの儀式として船、イラブー漁、畑のハチウクシーが行われる。また、2日から3日にかけて仲間や友人同士でグループを作り、各家に新年の挨拶をして回り、ご馳走や振る舞いを受けるヤーミグラーが行われる。大晦日に各家で行われるトゥシヌユールヌ^{フエ}挿^{フエ}については高橋（1981）の著書によると、ウムリングワ^フが大晦日の夕方に各家を回って挿^{フエ}みを行っていたとの記録がある。

2. 現在の旧正月について

久高島の正月行事は旧暦で行われており、12月8日のムーチーから始まり、年末、元旦から3日にかけて字を挙げての神行事や家庭での御願が行われ、さらに1年間の半分とされる6月24日にハーサーキーが行われた。2018年に行われた内容をもとに、概要を表1にまとめた。旧正月の行事は外間^{フカマトウン}殿で行われるシャク^{ウガ}拌^{アザ}みが字を挙げての神行事として行われるが、各家庭で行われる行事も多い。

表1 現在（2018年）の旧正月の概要

日時（旧暦）	行事	場所	概要
12月8日 12月24日	ムーチー	各家 各家	ムーチーを供えて厄払い。 ヒヌカン、トゥクノカン、トゥパシリ、仏壇で1年間の報告とお礼。
12月30日 夕方6時頃から	トゥシヌユール ヌ ^{フエ} 拌	各家	新年に向けての御願を行う。
元旦 午前10時から	シャク拌 ^{ウガ} み	フカマトウン 外間 ^{アザ} 殿	カミンチユ 神女の導きにより盃事が行われる。
1月2日 午前7時から 夕方まで	ハチウクシー	徳仁港 漁港	フェリー、高速船、各船で船の主によって航海安全祈願が行われる。 その後、それぞれの港で魚汁を作り、酒や刺身、唄や踊りで祝う。
午後から3日にかけて	ヤーメグルー	各家	島民が各家に新年の挨拶に回る。
1月3日 午前10時から 午後1時頃まで	ミッチャヌスク	フカマトウン 外間 ^{アザ} 殿	カミンチユ 神女の導きにより盃事が行われる。
終了後	シシヌ ^{フエ} 拌	各家	スンシーを供えて正月行事の無事終了の報告とお礼。その後から肉を食べることが出来る。
6月24日	ハーサーキー	各家	半年間の報告と残りの半年間の大漁や健康祈願。

トゥシヌユールヌ^{フエ}拌（大晦日）

大晦日に行う御願をトゥシヌユールヌ^{フエ}拌といい、各家で行われており、N家でのトゥシヌユールヌ^{フエ}拌を見学して見聞きしたことを記録した。年末は12月8日（旧暦）にムーチーと言われる餅粉を捏ねて月桃の葉に包んで蒸した餅を作って厄払いを行う。そして12月24日に家のヒヌカン、トゥクヌカン、トゥパシリ、仏壇で1年間の報告とお礼を伝え、それらを聴いた神様が一旦あの世に戻り、大晦日に新しい年の運勢を持って降りて来られる。その時にこれらの香炉を掃除して迎え、今年のお礼と新しい年の家族の無事、健康、繁盛などを祈願する。ヒヌカン、トゥクノカン、トゥパシリは潮の満ちてくる時に新しくするのがよく、仏壇は潮が引いている時がよいと言われる。当日の干潮時刻は13時過ぎであったので、仏壇は午前中、それ以外は午後新しくされ、夕方6時頃から当家を守る主婦によりトゥシヌユールヌ^{フエ}拌が始められた。お供えものとして、ピサイサンニの上に3つのンバイを載せた皿を2つ、サバの素揚げと大根の煮付けを載

せた皿を2つ、お酒、米がお盆に並べられたものが準備された（写真1）。ピサイサンニは直径15 cm 高さ5 cm ほどの平べったいおにぎりで、その上にンバイという直径5センチほどの丸く平べったいおにぎりが3つ載せられている。高橋（1981）の著書によるとピサイサンニはお礼、ンバイは家族の健康と栄えをウティン・ジーキ・ルーゲーという3つの神様にお願いするという意味を持つと言われている。また、魚と大根はいつも海の物、畑の物をいただいていることに対しての感謝を示している。お盆に載せられたお供えをヒヌカン、トゥクノカン、トゥバシリ、仏壇の順に運び、1年間のお礼と新しい年への祈願が唱えられた。祈りの後でお供えを箸でつまんで神様に運ぶ仕草をする。

各家の香炉の準備

各家ではヒヌカン、トゥクノカン、トゥバシリ、仏壇にお正月の準備がされており、H 家で見学した物を掲載する（写真2-4）。ヒヌカンとトゥバシリの香炉の前には赤、白、黄色の三色紙の上にミカンと酒が供えられ、トゥクノカンの香炉には左右に赤、白、黄色の三色紙の上にそれぞれミカンが3つ供えられていた。三色の赤は太陽、白は月、黄は土地を象徴すると言われる。また、海の物である千年貝やヤルー貝の貝殻が置かれていた。

元旦：西威王産屋

元旦のシャク^{ウガ}拌^{フカマトウ}みが始まる前に外間^{ウバヤ} 殿の西隣にある西威王産屋¹¹⁾にて、福治家の門中¹²⁾が御



写真1 トウシヌユール拌の供え物



写真2 三色紙で飾られたヒヌカン



写真3 三色紙で飾られたトゥクノカン



写真4 三色紙で飾られたトゥバシリ

神酒と料理を準備して、酌を交わし、新年の挨拶を交わしていた（写真5）。

元旦：^{ウガ}シャク^{フカマトウ}拌み（盃事）

元旦の朝、外間^{フカマトウ}殿は三色紙、トラノオ、みかんを飾って新年を迎える準備がされていた（写真6）。午前10時、神女^{カミンチュ}によるティルルが謡われ、2名の神女^{カミンチュ}が外間^{フカマトウ}殿に着座し、拌みが始まった（写真7）。区長の挨拶により、イキガジャク（男性の盃事）が始まった。はじめに背広^{ウブス}にネクタイまたは羽織に袴で正装した大主から順に2名ずつ外間殿に上がり、次に男子中学生が2名ずつ盃事を行い、最後は行事担当で終わった。かつては外間ヌルと根神が着座し、参列者と盃を交わしていたが、現在はどちらも不在のため、横に座した神女^{カミンチュ}の導きにより盃を拌んだ後、自分たちで神酒を注いでいる。拌み終わると、殿の前にてカチャーシー¹³を舞った。特に中学生が盃事を終えた時には家族も一緒にカチャーシーに加わっていた（写真8）。イナグジ



写真5 福治家門中の新年の挨拶(西威王産屋にて)



写真6 元日の外間殿



写真7 外間殿における元日の神女による拌み



写真8 男性がシャクトウイをした後に、身内の女性も一緒になってカチャーシーを舞う



写真9 シャク拌みの様子を見守るテーヤクした女性たち

ヤク（女性の盃事）は現在イザイホーを受けた女性が全てテーヤク¹⁴しているため、シャク^{ウガ}拌み^{ウガ}が出来るのは、神職者である神女^{カミンチュ}2名だけである。テーヤクした女性たちはシャク^{ウガ}拌み^{ウガ}が無事行われる事を見守っていた（写真9）。また、当日不在で参加できない人に対して、家族が代理で神酒をいただいて持ち帰るタビジャクが行われた。この神酒を家でヒヌカン^{フカトカン}に供えて無事を祈る。この日、外間^{フカトカン}殿前にはテントが張られシートが敷かれて、泡盛、ビール、刺身と大根の和え物がふるまわれ、観光客も含めて多くの人々が盃事を見守る。また、観光客については1000円を納めて参加することになっていた。ただし、盃事に参列するのは島人のみである。数年前は男性観光客も盃事を行っていたこともあるが、今年は島人のみとされていた。前述の1977年頃には、盃事の前に外間ヌルによるヘーナガーキと言われるティルル^{ウガ}が謡われたが、現在は外間ヌルが不在のため、ヘーナガーキが謡われることはない。シャク^{ウガ}拌み^{ウガ}もヘーナガーキも外間ヌルでないと出来ない事なので、誰も代理で行うことは出来ないと言われている。

2日：ハチウクシー

朝7時、徳仁港に停泊するフェリー、高速船に久高海運の乗組員全員が集まり、操舵室に赤白黄の三色紙に載せた酒、米、ミカンを供え、航海安全の祈願が行われた。

その後、三々五々に各漁船の持ち主が現れ、各自の船の舳先やエンジンに三色紙を敷き、みかん3個、米、刺身を供え、酒を掛けて航海安全と大漁祈願を行った。その後、刺身や酒を振る舞う船もあった。また、この日は徳仁港では4隻の船がハチウクシーを行っていた。H氏のサバニでは帆を立てるウシラキと言われる板に三色紙が敷かれてミカン3個、米、刺身が置かれ、酒をかけてハチウクシーの祈願が行われた（写真10、11）。その後、すぐに漁に出かける船もあった。港では皆で車座となって魚汁と刺身を肴に泡盛やビールを飲みながら、ハチウクシーを祝って、さんしんや唄、踊りで賑わった（写真12）。

漁港でもハチウクシーが行われ（写真13）、大きなブルーシートが敷かれ、魚汁や刺身が振る舞われ、さんしんや唄、踊りで、夕方近くまで賑わった。

ヤーメグルー

久高島では旧正月の2日から3日にかけて、グループで各家に新年の挨拶にまわり、振る舞い



写真10 徳仁港のサバニでハチウクシーを行うH氏



写真11 徳仁港でハチウクシーを行う漁師



写真12 徳仁港でのハチウクシーの宴



写真13 漁港でハチウクシーを行う漁師



写真14 F家の新年の酌の準備



写真15 酌を交わす家主と来客

を受ける、ヤーメグルーと言われる習わしがある。かつては次から次へと、来客があり、忙しく賑わったと言われているが、最近は島外に住む若者が増えたために、旧正月に帰って来てもシャク^{ウガ}拌みが終われば、急いで本島に戻る人が多くなったために、ヤーメグルーをする若者が少なくなったのではないかとされている。以下、今年F家で体験した新年の挨拶について記述する。一番座のテーブルに大漁祈願を願って海のものである盛り塩と鰹節、朱塗りの酒瓶と盃2つが準備されており(写真14)、これにより家の主と来客が盃事を行った。この時の盃事では健康祈願とともにお互いの和を共有しあうことが大切であるとF氏は語った。家の主がお酒を入れた盃を差し出し、客は塩と鰹節をひとつまみいただき、差し出された2つの盃のお酒をいただいて、盃に酒を注いで主に返す(写真15)。また、刺身、田芋、中身汁、サータアンダギーが振る舞われ、それらをいただきながら、色々な話をして楽しいひとときをすごした。このような事が次々と来る来客に対して行われる。また、U家へも新年の挨拶に伺い、お祝いの天ぷらであるカタハランプーや魚と大根の酢あえ、中身汁をいただいた(写真16, 17)。特に中身汁は豚の内臓を使ったすまし汁で、正月には欠かせない料理であり、年末から時間をかけて丹念に作られる各家の自慢の味である。久高海運のU家にも多くの来客があり、刺身の他に、田芋の天ぷら、サータアンダギー、赤寒天などが振る舞われた(写真18)。赤寒天も正月に作られる料理である。



写真 16 U 家で振る舞われたカタハラランブー



写真 17 U 家で振る舞われた中身汁



写真 18 U 家で振る舞われた田芋、赤寒天、サータアンダギー



写真 19 3日のシャク拌みの様子

このように、各家で家主と来客が新年の挨拶を交わし、和を深めてお互いの健康や幸せを願う慣習が昔ほど盛大ではないと言われるものの現在も残っている。

3日：ミッチャヌスク（盃事）

3日に行うシャク^{ウガ}拌みをミッチャヌスクという。イナゲジャク（女性による盃事）から始まるが、該当者である神女^{カミンチユ}の2名のみで行われた。区長の挨拶により、イキガジャク（男性による盃事）が開始された。元旦と同じく大主^{ウアシユ}の年長者から順に2名ずつ外間^{フカマトコン} 殿に上がり、盃事が行われた（写真 19）。また、この日の盃事は昼過ぎまで続き、終わりにはお粥が振る舞われた。

3日：シシヌ^{フエ}拌

3日の盃事であるミッチャヌスクが終わるのを見計らって各家ではヒヌカン、トウクヌカン、トッパシリ、仏壇に3日間の正月行事を無事に終えることが出来たお礼を言う。このときにスンシーと言われる昆布、タケノコ、こんにゃく、三枚肉の細切りの煮物と、その上に豚の三枚肉を3枚のせた物が供えられた（写真 20）。この三枚肉をシシ^{フエ}と言ひ、タケノコは健康祈願に通じる。久高島では正月の間は肉を食べない。3日のミッチャヌスクが終わると肉を食べることが出来る。N家でも、スンシーと三枚肉の煮物がたくさん作られていて、拌みによってお清めをされた後で新年始めての肉を家族で食べた。



写真 20 シシヌ揉の供え物



写真 21 ハサキの供え物

6月24日（旧暦）：ハーサキー

元旦から数えて半年である6月24日の日に各家庭で大晦日のトシヌユールヌ揉⁷のときと同じく、ヒヌカン、トウクノカン、トウパシリ、仏壇の順に半年間の報告と残りの半年間の大漁や健康の祈願が行われた。この日、供える高膳は、餅米のご飯、餅米（生）、鯖の素揚げ、結び昆布の煮付けであった（写真21）。

3. あとがき

久高島では現在も神女が行う神行事が年間20以上あるが、その中でも八月マティと旧正月の神行事^{アガ}は字を挙げて盛大に執り行われている。日本では正月は新暦で祝うところが殆どであるが、久高島では旧暦で祝っており、新暦の正月には何も特別なことはなく、むしろ年末の雰囲気である。また、島外から嫁いできた女性は里帰りや、島を離れて旅行に出かける人も多く見かける。島人にとっては旧正月がとても大事な行事であり、楽しみでもある。

神行事については外間ヌル、久高ヌルをはじめとした多くの神職者が存在しない今、それらの神職者が行っていたことは誰もが代行することは出来ないという厳格な考えがある。それゆえに、かつて外間ヌルが謡ったヘーナガーキはなく、シャク揉^{ウガ}みでは、本来、参列者が盃を交わす外間ヌルと根神の席は空席のまま、参列者が自分で注いだ御酒を揉^{フエ}んでいる。トシヌユールヌ揉もかつては各家で行われる神行事の司祭を務める神職者であるティンユタが各家庭を回って行っていたが、現在は各家庭で行っている。

また、イザイホーを受けた女性が全て70才を越えて退役しているため、イナグジャクができるのは神女^{カミンチユ}2名のみである。かつて、外間ヌルがシャク揉^{ウガ}みを行っていた頃に供えられていたンモーカシーも現在は作られてないので、かつてイザイホーを受け神女として神行事を支えてきたU氏に再現していただいたところ、甘藷の皮を剥いて3cmほどの輪切りにしたものを水で煮るといふ素朴なものであった（写真22）。これを供えてシャク揉^{ウガ}みの終了後、行事を支えた女性たちでいただいたということから、当時は畑の恵みに対する感謝、神行事を無事に終えた喜びとと



写真 22 U 氏に再現していただいたンモーカシー

もに味わい深いものであり、また、年の初めの神行事で供えたものをみんなで一緒に食べる事は楽しいひとときでもあり、連帯感を強くすることに繋がったのではないかと推察される。

今年は忌みの人が多かったためシャク拌^{ウガ}みに参列出来る人が少なかった。このように、島人は神行事における掟を慎重に守りながら、いかに行事を存続させるかという課題を抱えている。

注

- 1) イザイホー：久高島在住の主婦が島の神行事を支える神女（巫女）^{カミンチュ}になるための儀式であり、1978年まで12年に1回（午年）に行われてきたが、現在は行われていない。
- 2) ウムリングワー：おなり神とも言われ、生まれながらの神女。カンダーリと言われる神様からのお告げによって神女^{カミンチュ}なる場合が多く、儀式を受けて神職に就任する。
- 3) ソージヤク：祭事に関する準備を担当する階層の神女。ナンチュの年長者から順に就任する。
- 4) ンモーカシー：甘藷の皮をむいて、3 cm ほどの輪切りにして水で煮たもの。
- 5) バイカンヤー：久高殿の西隣にあり、ウミヘビの薫製を行う建物。
- 6) ピサイサンニ：直径 15 cm、厚さ 5 cm ほどの平べったいおにぎり。
- 7) ヒヌカン：台所に置かれた香炉であり、ガスが普及する以前は久高では東海岸からとってきた自然石三個を立てて作られたカマドをヒヌカンとしていた。人々の生活はカマドの火によって成り立っていることから、ヒヌカンには家族の生活を守る守護神がやどる。
- 8) トゥパシリ：各家の主婦の香炉、イザイホーを受けるときにはこの香炉に祖母霊を受け継ぐ。
- 9) トゥクヌカン：床の間に置かれた香炉。男性当主の守護神がやどる。
- 10) イラブージュージー：イラブウミヘビの炊き込みご飯。
- 11) 西威王産屋：久高島に住む神女であるシュラカマル^{カミンチュ}が西威王（英祖王統五代目、在位 1337～1349）^{フカマトウン}を出産したと伝えられている所であり、外間殿^{フカマトウン}の西隣にあり、シュラカマルの香炉がおかれている。
- 12) 門中：沖縄県における始祖を同じくする父系の血縁集団のことを示す。門中に似た概念を持つことばとして、同族があげられる。
- 13) カチャーシー：お祝いの時に踊る踊り。空気を両手でかき回して良い空気を分かち合う意味があるとされている。
- 14) テーヤク：イザイホーを受けた女性はその後、島で執り行われる神行事を支えていくが、70 才を迎えると、その任務を終える。そのことをテーヤクと言う。

謝辞

取材にご協力いただいた、西銘佐和子様、西銘千代様、福治友盛様、外間栄光様、福治洋子様、内間ツル様をはじめ久高島の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

参考文献

赤嶺政信（2014）「歴史のなかの久高島－家・門中と祭祀世界－」慶友社

- 桜井満偏、高橋六二著（1981）「沖縄県久高島の祭り－古典と民俗学叢書V－，暮れと正月行事」白帝社
- 当間一郎、友利安徳（1982）「神々のふるさと久高嶋 イザイホー・生活」沖縄公論社
- 比嘉康雄（1989）「神々の古層①女が男を守るクニ 久高島の年中行事Ⅰ」ニライ社
- 比嘉康雄（1990）「神々の古層②女が男を守るクニ 久高島の年中行事Ⅱ」ニライ社
- 比嘉康雄（1989）「神々の古層⑤主婦が神になる刻 イザイホー〔久高島〕」ニライ社
- 比嘉康雄（1993）「神々の原郷 久高島 上巻」第一書房
- 比嘉康雄（1993）「神々の原郷 久高島 下巻」第一書房
- 比嘉康雄（2000）「日本人の魂の原郷 沖縄久高島」集英社
- 山本恭子（2017）「沖縄県久高島の年中行事ハティグワティ 2014年から2016年の現状」，園田学園女子
大学論文集，51，61-69.

[やまもと ゆきこ 文化人類学]